

「思考力・判断力・表現力等」を育成するための指導とその評価 ～学び合いにおけるキーパーソンを見出し、活かす指導法の追究～

教育実践研究部長 村上 潤

1. はじめに

1. 1 「学び合い」の研究

新学習指導要領が、一昨年度より全面実施された。新学習指導要領では、「生きる力を育む」という理念は引き継ぎ、知・徳・体のバランスのとれた力を生徒たちに身につけさせることをめざしている。このうち、「知」に相当する「確かな学力」を構成する3つの要素（学力の3要素）である「基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「思考力・判断力・表現力等の育成」、「学習意欲の向上と学習習慣の確立」は、相互に関連し合うものである。

本校では、平成22年度まで、研究主題を「課題意識を高め、自らの問いを深める教育課程～学び合いを通して見つける価値ある学びとは～」と設定して研究活動を進めてきた。その結果、生徒一人ひとりの課題意識を高めることにより、次のような学習効果が得られたことを報告した¹⁾。

- * 「学び合い」を通して、論理的思考力や抽象的思考力を育成することができる。
- * 「学び合い」を通して、表現活動につながる力を育成することができる。
- * 「学び合い」を通して、授業の内容に基づいた学習の意義を理解させることができる。

そして平成24年度からは、「学び合い」についての研究成果を活かしつつ、新学習指導要領についての研究を改めて始めることとした。その際に、これまでの研究成果を活かすためには、学力の3要素のうち、「思考力・判断力・表現力等の育成」に着目することがよいと判断した。さらに、「学び合い」の場において、その活動を活性化させる生徒を「学びのエキスパート」ととらえることで研究を始めた。

本研究は3年間の計画で行うものとし、今年度はその最終年次となった。

1. 2 本校の教育目標と学校具体目標

研究主題は、理想の生徒像の達成をめざして設定されるものである。研究主題に基づいた研究活動を継続的に行うことで、生徒たち一人ひとりが「理想の生徒像」に近づかずである。仮に、生徒たちに変化が見られなかったときには、研究主題の設定もしくは研究方法に誤りがあったことになる。

では、本校はどのような理想の生徒像を掲げてきたか。本校では、「理想の生徒像」を次に示した教育目標と学校具体目標の形で表してきた。

<教育目標>

健康な身体とすぐれた知性と豊かな情操とを持ち、平和で民主的な社会の発展に貢献できる、自主的で創造性に富む国民を育成する。

<学校具体目標>

- ・自ら考え 実践する生徒
- ・創意を働かせ 工夫する生徒
- ・こころとからだを鍛える生徒
- ・考えや気持ちを的確に表現できる生徒
- ・思いやりや奉仕の気持ちを持つ生徒
- ・他から学び 自らを変革できる生徒

教育目標は昭和42年に制定された。その後、学校具体目標が制定されたのは、昭和53年であった。ただし、6つの学校具体目標のうち「他から学び 自ら変革できる生徒」は、平成15年に新たに付け加えられたものである。このことは「学び合い」を意識した学校具体目標が1つ加わったことを表している。研究主題を設定する際には、これらの目標との関連性に着目して取り組むことに留意した。

2. 研究主題

2. 1 「思考力・判断力・表現力等」のとりえ方

「思考力・判断力・表現力等のとりえ方」については、既に全国の研究校や研究団体によって研究が進められ、その成果が発表されてきた。それらの研究発表では、思考力・判断力・表現力等の定義づけを個別に行ったことによる成果がいくつも報告されていた。

その一方で、これら3つの力を関連づけて「まとまり」としてとらえる発表もあった。例えば、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校では、「研究の重点」のひとつに『思考力・判断力・表現力』を育てる学習指導と学習評価の実践と実証』を挙げて、『思考力・判断力・表現力』を学習指導の核にしつつ、妥当性、信頼性を高める学習評価の研究が行われてきた²⁾。また、熊本大学教育学部附属中学校では、「未来に拓くために必要な質の高い思考力・判断力・表現力」として「A 論理的な思考力・判断力・表現力」「B 多面的・総合的な思考力・判断力・表現力」「C 批判的な思考力・判断力・表現力」の育成を目指した研究が行われてきた³⁾。一方、千葉大学教育学部附属中学校は、「思考力から判断力、判断力から表現力という流れのサイクル」が次々に繰り返されて発展するというとりえ方を発表した⁴⁾。

本校では、平成24年度より思考力・判断力・表現力を研究主題に取り入れた研究を始めた。これらの3つの力については「まとまり」としてとらえることとし、個別に定義することは行わなかった。ただし、教科ごとの特性もあるので、教科独自に個別の定義を行うことは認めることとした。その結果として、一部の教科では、3つの力のそれぞれについて定義づけをすることや、3つの力の間に重みづけをすることが行われた。

ところで、これら3つの力について、文部科学省の表記では「思考力・判断力・表現力等」となっている。これに対して本校の平成24年度（1年次）の研究主題では、「等」を外して「思考力・判断力・表現力」と表した。その理由は、新たな研究主題による研究の1年次は、思考力・判断力・表現力に特化した研究を行おうと判断したことによる。しかし、「等」を加えた方が研究を進めやすい教科もあり、平成25年度（2年次）は「等」を加えることで研究対象の幅を広げることとした。

なお、研究主題の「指導とその評価」における「評価」としては、「教員による評価」や「生徒による自己評価」などを挙げることができる。本研究では、評価については、ひとつに限定することはせず、幅広く取り扱うこととした。具体的な評価の取り上げ方については、教科の判断に任せることとした。

2. 2 研究主題の副題の変遷

上述の通り、本教育研究の研究主題は、「思考力・判断力・表現力等」の育成に関わる内容で設定した。次に、この研究主題に対する具体的な取り組みを副題として表した。平成24年度からの研究の過程で、副題は次のように変遷してきた。

<研究主題の副題>

[平成24年度]	それぞれの場面でのエキスパートを追究する（仮）
[平成25年度]	それぞれの場面でのエキスパートを追究する
[平成26年度]	学び合いにおけるキーパーソンを見出し、活かす指導法の追究

昨年度までの2年間は、「エキスパート」ということばを取り入れた副題を設定してきた。これに対して今年度は、新たに「キーパーソン」ということばを取り入れた副題に変更した。この変更は、エキスパートについての研究を否定したことによるものではない。エキスパートからキーパーソンへ変更したことの経緯は後述する。その経緯を理解していただくためにも、まずは、昨年度までの「エキスパートについての研究」の成果を以下に記す。

2. 2. 1 「エキスパート」のとりえ方

「エキスパート」ということばを用いた学習方法として、一般的には「協調学習」⁵⁾を挙げることができる。これに対して、本校では「独自のエキスパート像」の確立をめざすこととした。また、副題の「それぞれの場面」としては、学習活動、学級・学年活動、部・委員会活動など、学校生活の各場面

想定した。しかし、実際に教育研究を進める際の具体的な場面としては「学習活動」が中心となった。

2. 2. 2 平成24年度の研究における「学びのエキスパート」

平成24年度に私たちがまとめた「エキスパートについての考え方」は次の通りである。

「エキスパート」は「活動の場面での引っ張り役」である。

それまでの教育研究のキーワードであった「学び合い」を継承することから今回の研究は始まった。そして、次のことをめざした指導に取り組んだ。

それぞれの活動の場において「学びのエキスパート」となる生徒が「引っ張り役」として仲間をまとめ、活動を活性化させる。

「学びのエキスパート」は、特定の生徒に固定されるものではない。生徒一人ひとりが、学校生活の中のいずれかの場面でエキスパートとなれるように「場を設定する」ことが、私たち教員の仕事である。

2. 2. 3 平成25年度から新たに考えた「学びのエキスパート」に関わること

「エキスパート」と同じような意味を持つことばとして一般的によく使われるものとして「スペシャリスト」と「プロフェッショナル」がある。「エキスパートの定義づけ」を確実にするためには、これら3つのことばの関係を明確にする必要があった。

教育現場における「スペシャリスト」ということばの使用事例を調べてみると、その数はエキスパートに比べてはるかに少ない。「スペシャリスト」は職業教育ではよく用いられているようである。

そして、「プロフェッショナル」ということばの教育現場での使用例は更に少ない。教育委員会制度の歴史に関する論文に「プロフェッショナル・リーダーシップ」という表現が見られる程度である。

瀧本哲史は、「エキスパートとプロフェッショナルとの違い」を次のように説明している⁶⁾。

- ・「エキスパート」は、ある分野の専門知識や経験が豊富で、それを売って生きている人。
- ・「プロフェッショナル」は、エキスパートの上位概念で、専門的な知識・経験に加えて、横断的な知識・経験を持つ人。それらをもとに、相手のニーズに合ったものを提供できる人。

一方、明治大学の図書館職員である坂口雅樹は、「プロフェッショナルとエキスパートとスペシャリストの違い」について、次のように説明している⁷⁾。

- ・「プロフェッショナル」は、不特定多数の人の様々な「悩み」を打ち明けられ、それを聞き取って相談にのり、自らの専門的立場からの適切な助言を与え、「その人」の悩みの解決のために全力を尽くすことを自らの使命とする職業人。profess（主張する、明言する）を受ける者。
- ・「エキスパート」になるとは「熟達する」こと。「図抜けている」こと。他者よりも「卓越している」こと。経験experienceを積んでエキスパートとなる。
- ・「スペシャリスト」は、主題（ある分野の）専門家。例えば「博士課程を修了した者は、図書館学専攻のエキスパートではないが、ある主題分野でのスペシャリストである」といえる。

紙面の都合上、事例の提示は上記の2つに止めるが、これらを踏まえて「プロフェッショナルとエキスパートとスペシャリストの関係」を次のようにまとめた。プロフェッショナルが最も上位となる。

「プロフェッショナル」	*知識・技能を求めている相手を見出し（聞く力）、 ↑ 知識・技能を発揮する（助言する）。
「エキスパート」	*経験を重ね、知識・技能の背景までが分かる。 ↑
「スペシャリスト」	*優れた知識・技能がある。

そして、「エキスパートの定義」を次のように定めた。

<「エキスパート」の定義>

間違いも含めて経験を積み重ねることで、上辺だけではない優れた思考力・判断力・表現力等を身につけた者。 *熟達者、極意を会得した者

ここにおける思考力・判断力・表現力等とは、上述したように、「まとまり」としてとらえることができる力とした。これらの力は、いつも均一に発揮されるとは限らない。場面に応じて、あるひとつの力が格別には発揮されることの方が多いであろう。

「エキスパート」よりも上位の立場として「プロフェッショナル」があるとする「研究主題の副題もプロフェッショナルということばを用いるべきだ」という考え方もある。しかし、本校の生徒たちの現状を見る限り、すぐにプロフェッショナルを想定することには無理があると判断した。

2. 2. 4 教育目標と研究活動との関係図

昨年度までの研究主題が、本校の教育目標と学校具体目標の達成をめざすために有効であることは、研究主題を設定する際に確認できた。そこで、「教育目標と研究主題と関わり」を図1のような関係図に表した。

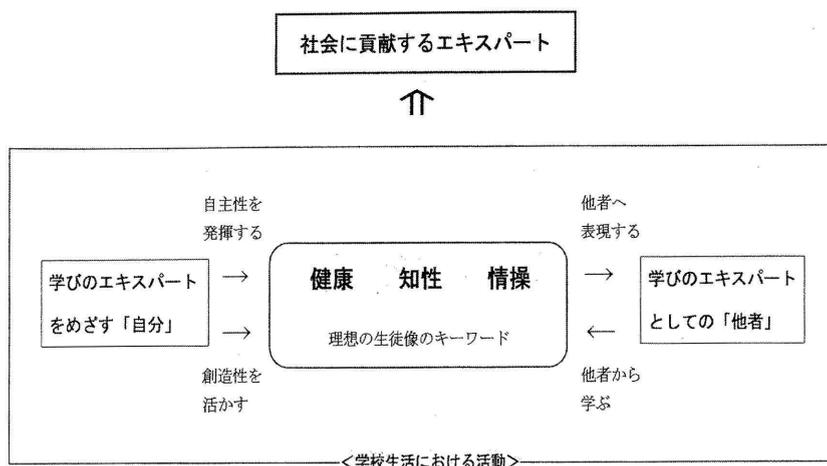


図1 本校の教育目標と研究活動との関係図

学びのエキスパートとなる生徒は、自主性や創造性を発揮しながら、自己と集団の活動の成果を向上させる。更には、他の学びのエキスパートへのはたらきかけや、他の学びのエキスパートから学ぶことを積極的に行う。これらの活動を通して、本校が教育目標に掲げている「すぐれた知性」「豊かな情操」「健康な身体」を身に着けた生徒として成長する。そして、将来は「社会に貢献するエキスパート」として活躍することが期待できる。

2. 2. 5 エキスパートからキーパーソンへ

昨年度までの2年間で、私たちは「学びのエキスパート」について、公開授業研究会は勿論のこと、その他にも様々な場面で発表・提案を行ってきた。「東京学芸大学の構内に建つ中学校」という地の利もあり、教育視察などの形で本校を訪問してくださる方は多い。そして、私たちの発表を聞いてくださった方々からは、貴重なご意見を多数頂戴した。それらの中からいくつかを次に示す。

<本校の考える「学びのエキスパート」に対する参会者からのご質問・ご意見>

- * エキスパートは、生徒が生まれつき持っているものなのか？育てるものなのか？
- * エキスパートは、大勢いるのか？単元の中でたまたま見つかるものか？
- * エキスパートを想定すると、「中心の人」と「面倒を見てもらう人」に分かれてしまう。
- * エキスパートを想定すると、「授業で便利な子を育てる」ととらえられてしまう。
- * エキスパートを「子どものよさ」と置き換えることはできるが、「教師が出番をつくる」のであれば、エキスパートでなくてよい。
→ 「子ども自身が授業をつくる」のであれば、エキスパートでよい。

- * エキスパートを「子どものよさ」ととらえると、附属中学校の生徒は「皆よい子」となり、一般的な提案にはならないのではないか？
- * エキスパートに「仲間を活性化させる」ことや「引っ張り役」まで求めることは可哀そうだ。
- * エキスパートを創ることが教育の目的になってはいけない。
→ 思考力・判断力・表現力はすべての生徒を対象に育成するものであり、エキスパートという一部の生徒を対象としたものではない。
- * 「学習のエキスパートに目を向けることから、その他大勢の思考力・判断力・表現力を考えることにつなげる」ことが大切である。
→ 「勉強が苦手な生徒に、エキスパートのメカニズムを当てはめても、根本的なものの考え方が異なるため、うまくいかない」ことに留意してほしい。
- * エキスパートは、「ある特定分野のこと（例えば、顕微鏡の操作技能に長けているなど）」に限定すれば理解できる。
- * エキスパートは、日本語では何というか？
- * エキスパートは、「よき聞き手」か？
- * エキスパートは、ひとつのことに収斂する役割か？多様性（公共性）に導くのか？

参会者からのご質問・ご意見をまとめると、「エキスパート」ということばが持つ強力なイメージの存在が浮かび上がってきた。私たちは「エキスパートとエリートは異なるものである」と考えている。これに対して、一般的には、エキスパートはいわゆる「スーパーマン」としてとらえられていることが見出せた。また、私たちは「学びのエキスパート」を「学び合い」の場における「引っ張り役」であるにとらえたが、その「引っ張り役」の活動に対して私たち教員がどのように関わるかについての分析が曖昧であることにも気づくことができた。一方、エキスパートということばから前述の「協調学習」を想起し、本校が協調学習の研究校であると誤解される可能性があることも分かった。

以上のように、これまで私たちは、「学びのエキスパートは『引っ張り役』である」ととらえてきた。しかし「引っ張り役の他にも多様なはたらきを行う生徒がいる」と考えることもできる。そこで今年度は、エキスパートを発展させた生徒像として「キーパーソン」を設定することとした。キーパーソンとなる生徒の具体像を次に示す。

<「キーパーソン」となる生徒とは>

- * 「引っ張り役」である必要はない。→多様なキーパーソンの在り方を考えてよい。
- * 「鍵となるはたらき」ができれば熟達者である必要はない。
- * キーパーソンは、誰でもなり得る。→「生徒一人ひとりを活かす」ことをめざす。
- * キーパーソンを教員が見つけて活かす。→教員の指導力が問われる。

そして「授業の場でキーパーソンを設定する場面」としては、次の2つが考えられる。

<キーパーソンを設定する2つの場面>

- 場面①；キーパーソンを「授業の場で見出す」
- 場面②；キーパーソンを「事前に選定して授業に臨む」

「公開授業」という観点から見ると、「キーパーソンの役割」を明確に提示するためには、場面①に基づいた授業を行うとよい。授業の場での「教員の判断（舵取り）」を協議会の話題とすることができる。「授業の場で見出したキーパーソンをいかに活かしたか」が協議の中心となる。勿論、「授業の場でキーパーソンを見出す」ためには、生徒一人ひとりについての理解が充分に行われていることが必須である。それゆえ、結果的には、「授業の場で見出した生徒」が「事前に想定した生徒」と一致することもある。

一方、場面②に基づいた授業の利点は、「キーパーソンとなる生徒の様子と、学び合いへの関わり」を事前に指導案に明記できることである。このことにより「参観の視点」を明確にすることができる。

教員の役割は「生徒一人ひとりの個性をとらえ、それが発揮できる場を設定し、適切な評価を与える

こと」である。この考えをキーパーソンに当てはめると、授業者の役割は「場面ごとにキーパーソンとなる生徒を見出し、その活動を活かすための指導と評価を行うこと」である。授業の場における私たちの教員の指導力が問われることとなる。

2. 2. 6 各教科によるキーパーソンのとらえ方

本年度の教育研究協議会では、教科ごとに、教科がとらえるキーパーソン像についての発表を行った。それらの中から「鍵となる発表」を次にまとめた。全教科に共通するキーパーソン像と併せて、教科に特有なとらえ方もあることが見出せた。

<国語>

- ① 他の生徒がまだ持っていない知識・技能・経験等を持っている生徒
 - ② 学習の流れの中で鍵となる発想や気づきができる生徒
 - ③ 鍵となる発想を提供することによって集団の質を高めていくことに貢献する生徒
- ・上記のような生徒は固定的に現れるものではない。生徒自身の自覚の有無にかかわらず、すべての生徒がキーパーソンになる可能性を有している。

<社会>

社会科では、学校の授業でのキーパーソンだけではなく、修学旅行などにおいて学校の外で出会った人も、生徒の学習や考えを深め、感動を与えてくれるキーパーソンであると考えられる。

<数学>

キーパーソンは「授業の学び合いの中で他者の活動をより高めるきっかけとなる生徒」と言える。ここでのキーパーソンは、他者より優れた考えや解法を思いついた、あるいは知っている生徒も含まれるが、単にキーパーソンの活動が優れていて、他者がそれを学び、真似ることだけを意味してはいない。

<理科>

- 学び合いの場において「鍵となるはたらき」をする生徒
- ・一人に固定されるものではない。多様な姿があり得る。
 - ・学び合いの過程で、自らと仲間の思考力・判断力・表現力等を向上させることができる。

<音楽>

キーパーソンを、むしろ「エキスパート」としてその存在をとらえていきたい。それは、中学での音楽表現活動の場合、既に生徒個々に得意分野・不得意分野がはっきりしていることが多く、生徒自身もそれをある程度把握しているからである。教科としては「授業の中でエキスパートを見出し、育てていく」ということも重要ではあるが、「各々の得意分野を授業の中で発揮させる」ことにより、昨年度まで追究してきたところのエキスパートとして、生徒が存分に個性を発揮し活躍する場面を数多く設けていきたい。そのような生徒のことを音楽科では今後「キーパーソン」の主軸ととらえて授業内で活かしていきたい。

<美術>

授業の展開を円滑にさせるため、また学習内容を高次に持ち上げるための活きたきっかけを生み出す存在であり、その全体の活動をより活性化させる存在としてとらえている。キーパーソンは、すべての生徒がなり得るものである。授業内容や展開、学級の子どもの実態や反応によってキーパーソンの在り方は異なる。どのタイミングでどのような生徒にスポットを当てるのかが問われる。

<体育>

- 活動を高次なものに引き上げる生徒／きっかけを作りうる生徒／きっかけを作る生徒
- ・運動能力の高い生徒のみならず、班長や副班長といった様々な役割を担う生徒、初めてその運動やスポーツに出会う生徒からも見出すことが可能であり、誰もがキーパーソンになる可能性を持ち合わせていると考えられる。

<保健>

共に授業を受けている仲間の学習を促進する生徒

- ・信頼できる情報収集の仕方を知っている／他教科等での既習事項や既知の事実を引き出せる／わからないことを尋ねられる／自分の考えを披露する／自分の内面や弱さを出せる／得意なことを生かして、学習に参加する／苦手なことに敢えてチャレンジする など

<技術>

学びの場において、他者と関わりを持ちながら、他者の知識や技能、認識等を一段高いレベルへと引き上げるうえで「鍵となるはたらき」ができる生徒である。秀でた知識や技能がなくとも、他者の意見を聞きながら、その他者とは違う角度から課題をとらえて自身の意見を述べたり、疑問を投げかけることが出来るような生徒も「キーパーソン」となりうる。

<家庭>

「キーパーソン」を「学びの場において鍵となる生徒」ととらえる。「キーパーソン」がいることで授業が深化し、生徒は、他人事でなく自分の問題としてとらえることができ、実際の生活の中で生かすことができる。

<英語>

学び合いの場において「カギとなるはたらきをする生徒」

- ・いわゆる「英語力のある生徒」や「リーダー」によるはたらきに限定されるものではない。
- ・誰もが授業のあらゆる場面において「学びのキーパーソン」になる可能性を持ち合わせている。

2. 2. 7 キーパーソンを取り入れたモデル図

2. 2. 4の稿において「教育目標と研究活動との関係図」を図1として示した。この図1は、平成24年度に作成したものであるため、「学びのエキスパート」を取り入れた図となっていた。そして、今年度からは、エキスパートを「キーパーソン」に置き換えることとした。図1は、「学びのエキスパート」と表した部分を「キーパーソン」に置き換えると、教育目標と研究活動との関係を示す図としては成り立たなくなってしまう。そこで、キーパーソンの考え方を取り入れた新たな関係図を作成し、次に図2として表した。

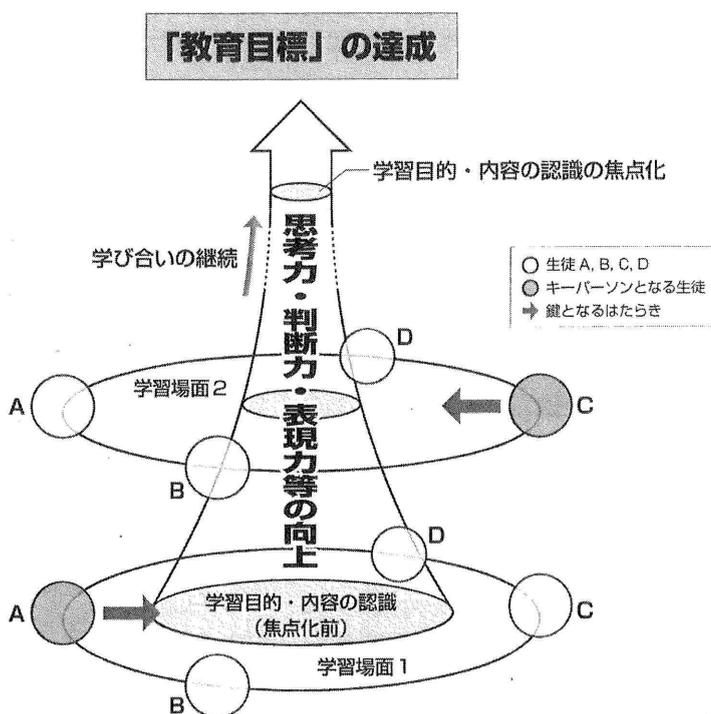


図2 本校の教育目標と研究活動との関係図（改訂版）

3. 研究仮説

3. 1 昨年度までの考え方

本校の研究主題における昨年度までの研究仮説と具体的な事例は、次の通りである。

＜研究仮説＞ 学びのエキスパートを育てると、思考力・判断力・表現力等が向上する。

＜具体的な事例＞ 仲間との作業において優れた技能を発揮できる生徒

ものを作る・書くなどの作業において、「作業をうまく行う手立て」を会得している生徒がいれば、その生徒は「学びのエキスパート」といえる。他の生徒たちは、その学びのエキスパートから手立てを教わることで、自らの技能を向上させることができる。学びのエキスパートとして手立てを仲間へ教えた生徒は、自らの存在価値を実感して、自信を持って授業に臨むことができるようになる。そのことによって、「思考力・判断力・表現力等」を向上させるきっかけもつかむことができる。そして、最終的には、その学びの集団全体の思考力・判断力・表現力等が向上する。

学びのエキスパートは、いわゆる「成績優秀者」に限定されるものではない。この具体的な事例では、技能面において優れた能力を持つ生徒の例を挙げた。この他にも、自ら意欲的な行動を示すことで学習集団の活動を活性化させる生徒など、色々な場面での事例を挙げることはできる。

留意すべきことは、「いくら優れた能力を持っていても、それを自分が有利になることのみを用いる者は、学びのエキスパートではない」ということである。優れた能力をもつ者は、その能力を仲間との学び合いにおいて発揮して、自らも仲間とともに自信を持つことで、学びのエキスパートとなる。

ところで、教育研究活動を進めていく過程で、複数の教科より「研究仮説は前後が逆の方がよい」という提案があった。その結果として新たに検討した研究仮説は次の通りである。

＜研究仮説の修正案＞

思考力・判断力・表現力等を向上させると、将来につながるエキスパートが育つ。

昨年度の公開授業研究会では、これら2つの研究仮説を併記することで提示し、どちらの研究仮説に基づくかは教科の判断でよいこととした。

3. 2 今年度の研究仮説

今年度は、上記の2つの研究仮説の調整を行う必要があった。更に、研究主題の副題において「エキスパート」を「キーパーソン」に変更したこともあり、改めて研究仮説を次のように設定し直した。

＜改訂した研究仮説＞

学び合いの場においてキーパーソンを活かすことで、その場にいる生徒たちの思考力・判断力・表現力等が向上する。

副題において「エキスパート」を「キーパーソン」に変更しても、研究主題と副題が本校の教育目標と学校具体目標の達成につながることは変わらない。今年度は、改訂した研究仮説に基づいて、各教科が研究に取り組んだ。各教科の研究成果は、本書において教科ごとに報告する。

4. 参考文献

- 1) 『東京学芸大学附属小金井中学校 研究紀要 第47号』(2011年3月)
- 2) 『横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校 研究紀要 第29集』(平成23年10月)
- 3) 熊本大学教育学部附属中学校『教えたいのは「考え方」です。』学事出版(2014)
- 4) 『千葉大学教育学部附属中学校 第46回中学校教育研究会』(2009年11月)
- 5) 東京大学大学院教育学研究科 大学発教育支援コンソーシアム推進機構ホームページ
- 6) 瀧本哲史『武器としての決断施行』星海社新書1 (2011)
- 7) 坂口雅樹「プロフェッショナル、エキスパート、スペシャリスト」明治大学図書館紀要3号(1999)